

## 現職教師が大学院で学ぶことの意義と現状（Ⅱ）

山形県村山市立戸沢小学校 小室 哲 範

### 1. はじめに

現職教師が大学院で学ぶことができるようになって約10年近くになる。制度化されたばかりの昭和57年頃は、地元「山形新聞」に「先生勉強嫌い？＝応募少ない県の大学院派遣制度」という記事が出るような状況もあったが現在は順調な応募者があると聞いている。私もまたこの制度が出来たことにより上越教育大学大学院「教育経営講座」で学ぶことのできた一人である。

本稿の問題意識の第1は私が大学院在学中に、1985年12月4日付の朝日新聞にのった「現場に帰って、すぐ役立つことは何もなかった。生活のペースを戻すのが一苦労だった」とする上越教育大学の修了者の声である。そこで大学院で学ぶこととは何かということ大学院在学中に考えたことを「学校経営研究」第12巻に「現職教師が大学院で学ぶことの意義と現状」として報告した。

問題意識の第2は当時も指摘したように「その意義を深く実感できるのは教育現場に復帰してらではないか。」ということである。大学院を修了して4年が経過しようとしている今「朝日新聞」に載った先輩の声をもとにもう1度考えてみたいということである。

以上のことを問題意識として、大学院在学時の友人の折りに触れてのことはなどを参考にしながら自分の体験をもとにして以下述べてみたい。なお、章の立て方などは在学中と比較という意味でなるべく「12巻」で使用したものを今回もできるだけ使っていくことにする。

### 2. 意義を考えるには前提的条件が必要

在学中思い到らなかったこととして「意義」を考えるには前提的条件が必要であるということがあげられる。例えば友人などと大学院で学んで良かったことは何かなどについて話すとき案外話が噛み合わないときがある。それこそ朝日新聞に載った先輩のような人もいれば、直ぐに役立ったという友人もいる。このような現象が起きる原因は往々にして「何処で、何を学び、帰ってきてどの立場に立ったか、話し合っている時点はいつか」といった前提的条件を明らかにしないままに結論だけを話し合うことにある。

この前提的条件が「意義」を考える上でかなり重要な位置を占めるということは当たり前といえば当たり前である。しかしこのことに気づくには案外時間がかかったように思う。在学当時は「12巻」に記したように一般的にこのような意義があると考えた。その後、体験との摺り合わせ

の中で感じていることは確かにあのようなことは言えるが「意義」をどう捉えるかはかなり個人的なものであり、前提的条件抜きにした万人に共通する意義はないのではないかということである。更に、個人にあっても個人の時系列の中での「キャリア」の移動によって「意義の強調点」は変化する。学級担任、教科担当、主任など自分の置かれた立場の移動によってかなり違ってくるということである。今、朝日新聞の先輩に当時と同じ問いを発したら同じ答えが返ってくるとはとても思えない。

### 3. 自己変革の契機を求めて

大学院在学中、何故大学院を目指したかということが話題になった。結論的にいえば入学動機は実に多種多様であり、個人にとっても単一動機だけではないということであった。ただいづれの場合も現状の自分に満足出来ず自己変革の契機を求めて入学してきたことは間違いがない。次に変化と思われるものの主なものについて述べていくことにする。

#### (1) 授業に取り組む姿勢

今回の指導要領改訂に伴い、創造性の基礎を培うため、新たな発想を生み出すもとなる論理的な思考力、想像力、直観力が重視されてきている。ここで指摘されていることそれ自体は別に新しいことではない。教師としての職にあったものにとってはこのことについて全く配慮することなく授業を行っていたという人はいないと思われる。ただ、このことの必要性を実感したことのある教師はそう多いとは思われない。その中であって大学院を修了したものは、修論をまとめる段階でこのことの重要性を身をもって実感したのではないだろうか。

この実感は、私の授業での重点の置き場所を変えさせることとなった。知識・理解の重要度が私の中で下がったのではなく、創造性への配慮が高くなったのである。ある事象に対して自分はどうか考えるか、どう想像するか、どう予想するか、自分の考えを他の人に理解してもらうにはどう表現するかというようなことを大事にするようになったのである。これを重視するということは学級経営で、どんな意見についても許容的な雰囲気づくりに気を配るということにもなる。

#### (2) 友人の広がり

大学院には全国からの教師が集まってくるので、必然的に全国的に友人が広がることになる。このことにより全国の情報が入っていくことになる。教材などで、ある県のものがほしい時などすぐ送ってもらえるということもある。それに案外重宝なのが友人が持っている人的ネットワークである。友人を介して、情報をもったり、その人に直接会って情報をもろうということもある。具体的な例を1つ挙げれば、友人のネットワークをある先生に紹介することによって、外国の日本人学校との作文交換が成立した。目的は、具体的に書く（知らない人でもわかるように）

とはどういうことかを理解することにあつた。この時は日本人学校の作文の立派さに驚くとともに具体的に書くとはどういうことか外国に作文を送ることによって初めてわかったという声が多かった。

それに校種の違う友人ができたことも有益であつた。現場では校種が違つたと案外付き合いがない。中学校で、高校でどんなことが問題になっているかは新聞などで知るのみで生の声に接する機会が少ない。現場に帰つて高校の先生などと話すときの話題がかなり豊富になつた。

### (3) 師の存在 — 学会などに参加するようになって

大学院での師の存在価値については「12巻」で論述したことと考え方のうえでそう変化はない。現場にでてからは大学院時代の声を交わした師に加えて、学会などに出てわれわれが著書や教育雑誌の記事や新聞の記事でしか知らなかつた先生方に直接会つたり、その声に接したりすること、大学院時代の先生方の紹介による大学やその他先生方の知り合いがふえたことが重要であるということをおげたい。文字だけでしか知らない時に読んだ時の印象と存在を思い浮かべながら読んだ時では印象が違うのである。こうしたことから、大学院で学んだことにより学会で発表したり、参加できるようになつたことも意義の一つにおげられよう。

### (4) 研究の活用

#### ① 初任研での活用 — 結果の活用

昨年私達の職場に2人の新採が配属になつた。初任研が本格実施になつた年でもあり、60日間の研修計画と実施には気を配つた。この時の考え方の基本にしたものは修論で考察した「教師の職能発達」であつた。指導案の書き方や構成のし方について「先輩の模倣でよい。」と言へたのは職能発達段階を考察した折りに結論をだしてつたことによる。

#### ② データをもとにした考察 — 方法論の活用

現場にはデータ処理するとまた違つた面が見えてくる情報が数多くある。例えば学力分析のひとつにしても処理の仕方をかえて見ると業者からのコメントとは別の面が現われる。このようなデータ処理の方法を身につけることができたのも大学院で学んだものであつた。

## 4. 大学院生活をふりかへて

### (1) 学識の拡大は「気づき」「体験」「人脈」

大学院時代は学識の拡大とは一言で言えば知識の拡大ではないかと考えてつた。大学院でも案外広い範囲にわたつて授業を受けてつる。その中で現在使つてつる知識はごく僅かである。その多くはほとんど忘れてしまつてつる。残つてつるものは学問の最先端ではこんなことが問題になつてつるのかという「感じ」即ち多様な視点への「気づき」、論文を作つたときの「体験」と「人脈」

である。これらこそ大学院にいったことによる学識の拡大ではないだろうか。「説」や「理論」には多くの場合反論があるという事実に接したことも案外わたしには新鮮であった。現場でも「授業を通した研究発表」がよくおこなわれている。そこでは・・・の理論あるいは説にのっとって実践していますというものがある。そのときその説や理論にはこのような反論もあるというところまでは検討したことがなかったからである。学識の拡大とは知識の拡大もさることながら「気づき」「体験」「人脈」による価値観の変化ではないかと現在考えている。

#### (2) 経験それ自体にはそれほど「意義」はない

大学院では私の意識に登らないものも含めて多くの経験をしている。だが経験したことそれ自体に「意義」があるのではない。経験をどう生かすかということこそ問題なのであり、そこに「意義」が生まれる。経験をしたというだけでは自分の血肉にはならない。本当に学んだのであったら必ず現場に生きていく。

#### (3) 肩書きだけで勝負してはマイナス

現場に帰って、自分は大学院に行っていたということになるべく言わないようにしているとの声を聞くことがある。このことは言わないのが当たり前であると思う。行っていたという事実それ自体にはそれ程「意義」がないことは前述した通りである。肩書きだけの自己意識が先行したら自分の職能発達のためにも職場のモラルのうえでもマイナスでしかない。

#### (4) 生活のペースを戻すのは一苦労である

現職の教師が大学院に行くには最低でも3年間の現場経験が必要である。ほとんどの教師はその学校においてなんらかの推進者になっていることが多い。現場の変化は思っている以上に変化が速い。2年間も現場を離れていると学校全体の動きの中で、推進者どころかついていくことにさえ苦労するという状況が生まれる。

更に、授業の教材に対する知識・感覚や児童・生徒に対する反応力も相当失っている。現場的な表現で言えば教材や児童・生徒が見えなくなっているのである。多くの大学院修了者が現場に帰ってしばらくの間は「こんなはずはない」という感じを持ったのではなからうか。

### 5. おわりに

現職教師が大学院で学ぶことについて「意義」を捉える立場はいろいろと考えられる。例えば、大学院での教官、研修に出した教育委員会、同僚などである。このような人々の意見も制度の定着化に伴い「意義」についてある一定の方向を持ちはじめたのではないだろうか。是非聞いてみたいものである。

最後に、「大学院で学んだこと」を振り返る機会を与えていただいたことに感謝したい。この頃では自分が大学院で学んだということを意識することは非常に少なくなっている。本稿をまとめるにあたり、私の日々の行動の中に大学院経験がどのように入りこんでいるかを意識するよい機会となった。現在の私の行動の原点の1つになっていたことを改めて認識させられた次第である。